

性差マーカ－の「自然さ」

—小説中の会話文と実際の会話との比較—

Ruth Vanbaelen

0. 問題提起

書きことばと話しことばが異なることは当然のことである。書きことばでは許容される表現が必ずしも話しことばとして許容されない。また、会話で自然と思われるものが文章において不自然とされる場合がある。その点、小説の会話文は興味深い観察対象である。それは、書かれたことばでありながら、会話としての「自然さ」が要求されるものだからである。本稿は、小説の会話文で使用される性差マーカ－¹⁾がどの程度読み手に「自然な」言語表現として許容されるか、また、実際の会話で使われる表現とどれほどの違いがあるかを調べ、日本語の性差マーカ－の役割について考察を加えるものである。

最近の性差に関する研究において(若い)日本人女性の話しことばづかいは「女性らしく」なくなってきたことが指摘されている(Reynolds 1990, Okamoto & Sato 1992)。しかし、若い女性を描いている現代小説の中には非常に多くの性差マーカ－を含むものがある。特に登場人物のセリフにとっても「女性らしく」聞こえる終助詞や丁寧な話しことばづかいは使用される場合が目立つ。先行研究の結果にもかかわらず、このような小説が若い女性にかなりの人気を呼んでいる。読み手が小説に使用される性差マーカ－を自然なものとして受け取るかどうか、そして自分自身が会話で同じような内容を伝えるときにどのように表現するか、この2つの点を明らかにするために、本稿では江國香織著『流しのしたの骨』を資料として選択し、次節に示す調査を行った。

本稿の目的は単に小説中の会話文と実際の話しことばとの差異を提示することではない。それよりも、性差マーカ－が会話文において許容されるのに対し、実際の話しことばではあまり使われていない状況の分析を通して、現代日本語の性差マーカ－の使用が変化の過渡期にあることを明らかにするのが目的である。

1. 調査の概要

調査は2001年6月に筑波大学の大学生・大学院生を対象に行った。大学生・大学院生を選んだ理由は資料として使用する小説の主人公や他の登場人物との年齢や生活範囲が

類似しているからである²⁾。被験者の年齢は18歳から24歳の間で、女性は57人、男性は27人、計84人である。

調査は質問紙による調査で、全体は第1部および第2部からできている。第1部は被験者が小説においてどの語句を性差マーカーとして読みとるか、そしてさらに、一方の性の発話が他方の性の発話より判定しやすいかどうか調べることを目的としたものである³⁾。本稿で扱う第2部では文脈をはっきりさせた8つの短い会話⁴⁾を取り上げ、被験者に各会話の各発話者のセリフが自然であるかどうか3段階で(自然・やや不自然・不自然)判定してもらい、そしてさらに被験者自身が同じような場面でどのように話すか書いてもらった⁵⁾。被験者自身が同じ内容をどのように表現するかを書いてもらうことによって小説における会話と実際の話しことばとの間のギャップが大きいかどうか、そして差異がどこにあるかを把握することができると考えたからである。

2. データ分析

今回資料とした小説は、著者の個人的なスタイルによって、小説中に使用されている表現が柔らかく、登場人物が穏やかな感じで男性的と思われる乱暴なことばづかいなどが現れない。そのため、男性性または男性の発話の「自然さ」を測るためにこの小説はあまりふさわしくないため今回は女性性を示すマーカーを中心に論じる。発話の「自然さ」に関する分析では男女被験者の間に回答に隔たりが生じても、紙数の都合によりそれには触れず女性被験者の回答のみ扱うことにする。表1には参考のため男性被験者および合計の結果も示す。書き換えの分析では男性の発話においてほぼ書き換えがなかったため分析を女性の発話のみに限ることとする。

2.1 自然な発話か？

調査では非常に女性的に聞こえるマーカー⁶⁾を含む発話をいくつか故意に選択した。しかし、それにも関わらずほとんどの発話者が自然に話していると過半する被験者に判定された(最低47.4% (27人) (2-1)⁷⁾、最高98.2% (56人) (5-1))。「自然」という回答が70%以下なのは終助詞「かしら」(1-1、3-1) および終助詞「わ」(2-1、2-2、3-1)を含む女性による発話であった。しかし、これらの発話でも実際に「不自然」と回答した被験者は少ない(1.7% (1人) ~ 8.8% (5人))。

2.2 書き換え：小説における会話文および実際の話しことば

被験者に各会話の「自然さ」を判定してもらった後、自らが同じようなシチュエーションにいる場合、どのような表現を使うか書いてもらった。つまり、この書き換えはより自然な方向(実際の自然会話に近づける方向)で行われるのである。被験者の回答を見ると、主な書き換えは2つのレベルで行われている。1つは性差マーカーとしてかなり明白である終助詞を含む発話を書き換えること、そしてもう1つはフォーマリティーに

表1：発話の「自然さ」

男＝男性被験者（27人）、女＝女性被験者（57人）、合計＝男女被験者の合計
括弧内は被験者の男女別および全員の回答の内訳パーセンテージを示す。

| 発話者 | 無回答 | | | 自然 | | | やや自然 | | | 不自然 | | |
|-------------|-------------|------------|------------|--------------|--------------|--------------|-------------|--------------|--------------|-------------|------------|------------|
| | 男 | 女 | 合計 | 男 | 女 | 合計 | 男 | 女 | 合計 | 男 | 女 | 合計 |
| 1-1 こと子 | 0 (0) | 0 (0) | 0 (0) | 19 (70.4) | 37 (64.9) | 56 (66.6) | 8 (29.6) | 18 (31.6) | 26 (30.9) | 0 (0) | 2 (3.5) | 2 (2.4) |
| 1-2 深町・男 | 0 (0) | 0 (0) | 0 (0) | 22 (81.5) | 51 (89.5) | 73 (86.9) | 5 (18.5) | 6 (10.5) | 11 (13) | 0 (0) | 0 (0) | 0 (0) |
| 2-1 友人・女 | 0 (0) | 2 (3.5) | 2 (2.4) | 17 (63) | 27 (47.4) | 44 (52.4) | 7 (25.9) | 24 (42.1) | 31 (36.9) | 3 (11.1) | 4 (7) | 7 (8.3) |
| 2-2 こと子 | 0 (0) | 1 (1.7) | 1 (1.2) | 19 (70.4) | 36 (63.1) | 55 (65.4) | 7 (25.9) | 15 (26.3) | 22 (26.2) | 1 (3.7) | 5 (8.8) | 6 (7.1) |
| 3-1 こと子 | 0 (0) | 1 (1.7) | 1 (1.2) | 21 (77.8) | 36 (63.1) | 57 (67.8) | 5 (18.5) | 19 (33.3) | 24 (28.6) | 1 (3.7) | 1 (1.7) | 2 (2.4) |
| 3-2 律 | 1 (3.7) | 0 (0) | 1 (1.2) | 22 (81.5) | 53 (92.9) | 75 (89.2) | 4 (14.8) | 4 (7) | 8 (9.5) | 0 (0) | 0 (0) | 0 (0) |
| 3-3 母 | 1 (3.7) | 1 (1.7) | 2 (2.4) | 23 (85.2) | 52 (91.2) | 75 (89.2) | 3 (11.1) | 4 (7) | 7 (8.3) | 0 (0) | 0 (0) | 0 (0) |
| 4-1 こと子 | 0 (0) | 0 (0) | 0 (0) | 25 (92.6) | 54 (94.7) | 79 (94) | 2 (7.4) | 3 (5.3) | 5 (5.9) | 0 (0) | 0 (0) | 0 (0) |
| 4-2 母 | 0 (0) | 0 (0) | 0 (0) | 27 (100) | 53 (92.9) | 80 (95.2) | 0 (0) | 4 (7) | 4 (4.8) | 0 (0) | 0 (0) | 0 (0) |
| 5-1 母 | 4 (14.8) | 1 (1.7) | 5 (5.9) | 22 (81.5) | 56 (98.2) | 78 (92.8) | 0 (0) | 0 (0) | 0 (0) | 1 (3.7) | 0 (0) | 1 (1.2) |
| 5-2 こと子 | 3 (11.1) | 0 (0) | 3 (3.6) | 20 (74) | 53 (92.9) | 73 (86.9) | 4 (14.8) | 4 (7) | 8 (9.5) | 0 (0) | 0 (0) | 0 (0) |
| 6-1 深町・男 | 0 (0) | 2 (3.5) | 2 (2.4) | 18 (66.7) | 48 (84.2) | 66 (78.6) | 8 (29.6) | 6 (10.5) | 14 (16.7) | 1 (3.7) | 1 (1.7) | 2 (2.4) |
| 6-2 こと子 | 0 (0) | 0 (0) | 0 (0) | 24 (88.9) | 50 (87.7) | 74 (88.1) | 3 (11.1) | 5 (8.8) | 8 (9.5) | 0 (0) | 2 (3.5) | 2 (2.4) |
| 7-1 こと子 | 1 (3.7) | 1 (1.7) | 2 (2.4) | 25 (92.6) | 53 (92.9) | 78 (92.8) | 0 (0) | 3 (5.3) | 3 (3.6) | 1 (3.7) | 0 (0) | 1 (1.2) |
| 7-2 律 | 0 (0) | 1 (1.7) | 1 (1.2) | 19 (70.4) | 46 (80.7) | 65 (77.3) | 5 (18.5) | 7 (12.3) | 12 (14.2) | 3 (11.1) | 3 (5.3) | 6 (8.3) |
| 8-1 こと子 | 1 (3.7) | 2 (3.5) | 3 (3.6) | 19 (70.4) | 41 (71.9) | 60 (71.4) | 5 (18.5) | 12 (21) | 17 (20.2) | 3 (11.1) | 2 (3.5) | 5 (5.9) |
| 8-2 律 | 1 (3.7) | 3 (5.3) | 4 (4.8) | 22 (81.5) | 46 (80.7) | 68 (80.9) | 3 (11.1) | 7 (12.3) | 10 (11.9) | 1 (3.7) | 1 (1.7) | 2 (2.4) |

関わる発話を基本的にフォーマリティーを下げる形で書き換えることである。

以下、被験者によって書き換えられた語句を、性差マーカーとフォーマリティーに関わるものに分けて基本的に検討する。

2.2.1 明白な性差マーカー：終助詞

1) 「の」

単独の終助詞として「の」は6つの発話に現れている(3-g、4-a、4-c、6-b、7-a、8-a)。「自然さ」は63.1%から94.7%の間で、かなり高い。書き換えを行わなかった被験者もかなり多い。3-gの場合29人(50.9%)、4-aの場合47人(82.4%)、4-cの場合46人(80.7%)、6-bの場合45人(78.9%)、7-aの場合45人(78.9%)、8-aの場合38人(66.6%)である。

「の」が書き換えによって省略される場合がある。これは疑問を表す場合でも、発話者が意見を主張する場合でもみられる。

例1: 4-a こと子→母 「きのうのこと、とうさん何て言い訳したの？」

書き換え: 「きのうのこと、父さん何て言い訳した？」(6人(10.5%))

例2: 4-c こと子→母 「うん、ちょっとでかけるの」

書き換え: 「うん、ちょっと出かける」(7人(12.3%))

逆に疑問文に「の」の付加や発話者の意見を主張する発話に断言を表す「んだ」に書き換えられる場合もあるが少ない。

例3: 8-a こと子→律 「どうだったどうだった？おもしろかった？」

書き換え: 「なんだったの？」(5人(8.8%))

例4: 4-c こと子→母 「うん、ちょっとでかけるの」

書き換え: 「うん、ちょっと出かけるんだ」(4人(7%))

2) 「かしら」

「かしら」は4つの発話に現れている(1-a、1-c、1-e、3-e)。これらの発話の「自然さ」は63.1%から64.9%の間であるが、発話を書き換えず、そのまま自分のものにする被験者は30%前後に過ぎない(1-a: 22.8%、1-c: 24.6%、1-e: 21%、3-e: 31.6%)。

被験者は主に「かな(あ)」、そしてさらに「んだろ(う)(ね)」への書き換えを選ぶ。

例5: 1-a こと子→深町直人 「恋人っていうのは好き同士なのにどうして別れちゃうのかしら」

書き換え: 1) 「恋人っていうのは好き同士なのにどうして別れちゃうのかな(あ)」
(23人(40.3%))

2) 「恋人って好き同士なのにどうして分かれちゃうんだろう(ね)」
(13人(22.8%))

3) 「わ」

「わ」は3つの発話に現れている(2-b、2-c、3-g)。「自然さ」は47.4%から63.1%の間であるが「かしら」を含む発話と同様に書き換えを行わない被験者は「自然」と判定した被験者の半分に満たない(2-b: 19.3%、2-c: 24.6%、3-g: 29.8%)。

この終助詞は省略されるか「よ」に書き換えられる。

例6: 2-c 友人(女)→こと子 「留学するって書いてあったわ」

書き換え: 「留学するって書いてあった(よ)」(33人(57.9%))

終助詞「の」は、現在男女ともによく使用される終助詞である。さらに、発話の「自然さ」が高いため書き換えはそれほどなかったと考える。

「かしら」および「わ」の書き換えや省略はあらかじめ予測することができた。女性がこれらの終助詞を話しことばにおいてあまり使わなくなってきたことが先行研究にも取り上げられている。資料として使用した小説の登場人物は特別に「かしら」や「わ」の使用が期待されるような役割ではないにもかかわらず著者がなぜこの終助詞を使用したのか、そして多くの被験者がその使用を「不自然」なものとして判定しなかったにもかかわらず、実際の会話になると、なぜ書き換えを行ったのか考える必要がある。著者が小説中の会話文において性について欠けている情報を補うために多少極端に「かしら」や「わ」を使わせているのではないかということが理由の1つとして挙げられる。そして被験者の方では、社会による期待というメカニズムによって、おそらく一種の書きことばである小説中の会話文においてこれらの終助詞の使用を許容しても、自分自身は規範に先行している行動様式の変化に伴って異なる言い方を選択すると考える。社会による期待については「考察」のところでより詳細に記述する。

2.2.2 フォーマリティー

1) 動詞の文末形式

a. 「んですって」(2-c、「自然さ」47.4%)はよりインフォーマルな「んだって」に書き換えられる。書き換えを行っていない被験者は14人(24.6%)である。

例7:2-c 友人(女)→こと子 「大学を辞めちゃったんですって。」

書き換え:「大学(を)やめちゃったんだって」(37人(64.9%))

b. 「でしょう」(8-a、「自然さ」71.9%)は「でしよ」に書き換えられる場合がある。書き換えを行っていない被験者は38人(66.6%)である。

例8:8-a こと子→律 「担任に呼び出されたんでしょう?」

書き換え:「担任に呼び出されたんでしよ」(7人(12.3%))

2) 格助詞類の省略

a. 格助詞「を」は3つの発話に含まれている(2-c、「自然さ」47.4%; 3-e、「自然さ」63.1%; 6-b、「自然さ」87.7%)。「を」が省略される場合があるが発話と発話との間の差が大きい。2-cの場合、「を」を省略した被験者は22人に対して、3-eと6-bはそれぞれ5人と6人とどまる。

例9:2-c 友人(女)→こと子 「大学を辞めちゃったんですって。」

書き換え:「大学辞めちゃったんだって」(22人(38.6%))

b. 格助詞「が」は3つの発話に含まれている(1-e、「自然さ」64.9%; 2-a、「自然さ」47.4%; 3-c、「自然さ」63.1%)。「が」が省略される場合があるが「を」と同様に発話によってかなりの差が生じる。2-aの場合、19人が「が」を省略するが、1-eおよび3-cには省略が見られない。

例 10：2-a 友人（女）→こと子 「ね、岸子から年賀状が来た？」

書き換え：「ね、岸子から年賀状きた？」（19人（33.3%））

c. 助詞「は」は2つの発話に含まれている（1-a、「自然さ」64.9%；3-a、「自然さ」63.1%）。
「は」が省略される場合がある。1-aの場合6人、3-aの場合8人が「は」を省略した。

例 11：3-a こと子→母、律 「私は何になったらいいと思う？」

書き換え：「私何になったらいいと思う？」（8人（14%））

Takano (2000) は助詞「は」の省略は世代および社会階層によって影響されるという。つまり、発話者が社会人で地位のある立場にいればいるほど「は」の省略が少ないという指摘である。したがって、以前の研究によって包括的に「女性」のことはづかいの特徴とされてきた「は」の省略 (Shibamoto 1985, 1990) は実際には発話者の社会への参加による度合いによって左右される。本調査の被験者が大学生であることを考慮すれば、彼らの地位も、社会への参加も限られているため、「は」の省略は Takano の研究結果を反映しているのだろう。さらに、Takano (2000) ではインタビューにおける3つのスタイル（回答スタイル・物語スタイル・会話スタイル）で「は」の省略を考察した結果、話し手が聞き手からフィードバックおよび積極的な参加を求め、聞き手を会話に含もうとする会話スタイルは「は」の省略に効果的な影響をもたらすと言う。これは今回扱った会話文の特徴にあてはまるものであり、書き換えで「は」が省略される場合にその理由の説明になる指摘である。その上、共通のバックグラウンドおよび共通の知識をもつ者には言語的な節約が許され省略が容易に考えられる (Finegan and Biber 1994 : 320)。調査に扱った発話はほぼ同じ年齢同士の者や同じ家庭のメンバーが多く、彼らに共通のバックグラウンドがあるため、これらの条件を満たしていることとなり、「は」が省略されるものと推測できる。

格助詞類の省略が目立つのは、よく報告されている「は」の省略より「を」や「が」の省略の方が多いということである。今回の分析では傾向のみ取り上げることになったが、「を」および「が」の省略は Takano による「は」の省略に関する議論と同じようのものであると考える。そして、発話によって省略が多かったり、少なかったりする理由は聞き手がある程度影響を与えていると考える。2-c は友人同士の場面で、うち解けた雰囲気でもあるが、3-e の場合、相手が母親であり、そして内容もやや真面目なものであるため省略が少ないと考える。

3) 名詞の書き換え

被験者は場合によって漢語を和語に書き換えている場合がある。

例 12：「職業」（3-c、「自然さ」63.1%）

書き換え：「仕事」（3人（5.3%））

例 13：「模索中」（3-g、「自然さ」63.1%）

書き換え：「考え中」または「考えているところ」（11人（19.3%））

4) 縮約形

・「分からない」(3-g、「自然さ」63.1%)は縮約形の「わかんない」に書き換えられる。

例 14: 3-g こと子→律 「わからないわ」

書き換え: 「わかんない」(19人(33.3%))

フォーマリティーの面では、書き換えられた被験者自身の発話は明らかによりインフォーマルなことばづかいへの傾向をみせている。格助詞類の省略や動詞のよりインフォーマルな形への書き換え、漢語より和語の選択などがその印である。終助詞の省略とも同様の傾向で、小説中の発話は実際の話しことばになると性差マーカ―が少なくなり、発話が多くの場合より短いもの―に書き換えられているということになる。さらに、性差マーカ―の付加も、「の」以外、見られないことから実際の会話は小説中の会話より性差に関して中立的であることが分かる。

3. 考察

「自然さ」に関する判定と書き換えを合わせて考察すると一見矛盾しているように感じられる結果がでた。それは「自然」という判定が多いにも関わらず書き換えがかなりあったということである。つまり、被験者が各会話を読み、それを高い割合で「自然」と判定した場合、書き換えの必要性も少ないはずだと推測されるにも関わらず実際には多かったのである。そこで以下先ず「自然さ」の判定について、そして次に書き換えとの関連について考察する。

3.1 「自然さ」に関する考察

先行研究が示すように若い女性のことばづかいは「女性らしく」なくなっている、または性差に関してより中立的になってきている。しかし、本調査で扱った女性特有とされてきた終助詞を含む発話でもあまり不自然と判定されていないことを考慮すれば、被験者は少なくとも一種の書きことばである小説中の会話文の場合、このようなマーカ―に対して違和感を示さず許容するといえる。この現象は次のように説明できると考える。

社会には以下のような「期待」とも呼べるメカニズムが存在すると考える。各社会には習慣から生まれたルール・規範が潜在している。その社会のメンバーである個人は暗黙のうちにこれらに従わざるをえない。従わない者は社会から批判されることがある。行動様式(服装や他人との付き合い方、話し方など)の変化が規範に先行して社会的に許容されるようになる。許容後には潜在しているルール・規範が遅れて変化する。言語にも似たようなメカニズムがみられると考えられる。つまり、習慣からある者のことばづかいがこうであるべきだという規範が生まれる。金水(2000)がいう「役割語」がこ

れに近いものであろう⁸⁾。時間の経過につれて習慣が変化し、規範の変化が遅れて追隨する。例として女性のことばづかいに関する Takano (2000:48) を引用することができる。

Politeness and indirectness as linguistic manifestations of women's social personality have thus become the culturally recognized norms for the speech of Japanese women in general.

要するに、場面に応じた丁寧さや間接性が次第に場面に関係なく女性全員の「こうであるべき話し方」であると社会が考えるようになってきた。それに従わない者、この場合「女性らしく」ないことばづかいをする女性は社会から批判を受けることがある (Reynolds 1990)。最近みられることばづかいの変化は社会的許容を先行すると考えられる。そのため、女性のことばづかいが「女性らしく」なくなってきたと、例えば Okamoto & Sato (1992) が指摘しているにもかかわらず、本調査の被験者は非常に女性的なことばづかいを自然なものと判定する。それは彼らが「女性は女性らしいことばづかいをすべきだ」という基準を背景に育ってきたことと、書きことば、とりわけ小説に使用されることばづかいは普段の話しことばよりも多少「遅れ」ており、規範がまだ認められているからだと考える。したがって、被験者は小説中の会話においてそのようなことばづかいを認めるのだが、実際に話すとき自分を同じマーカで表現するとは限らない。まさしくそこが小説中の会話文と実際の話しことばとのギャップ (の一部) であると考えられる。

3.2 「自然さ」と書き換えとの関連

被験者が小説中の発話を「自然」と判定したにもかかわらず、同じシチュエーションに自分自身が別の言い方を選択するという事は、書きことばにおける会話文と実際の話しことばの間にギャップが存在する証拠となると考える。

調査結果を見れば、「自然」という判定と書き換えの有無が無関係だとは言えない。「自然さ」の割合が高ければ高いほど書き換えも少ない。例えば、「の」や「んでしょ」を含む発話は「自然」という判定が多く、書き換えも少なかった。しかし、すべての場合が比例的な関係であると言い切れないのである。例えば「かしら」や「わ」、「んですって」や格助詞「を」や「が」を含む発話の場合、書き換えを行わなかった被験者の割合が「自然」と判定した被験者の割合を大きく下回る。つまり、小説中の発話文が自然だと感じて被験者自身が必ずしも同じ言い方をするというわけではない。

機能的な面から言えば終助詞は小説中の会話で発話者の性をはっきりさせるため非常に役に立つマーカとなっている。性差マーカとして終助詞は読み手にとって、小説を楽に理解するため重要な機能を果たしている。フォーマリティーは性差マーカとして終助詞ほど認識されないかもしれないが、上記に議論したように丁寧さが女性のことばづかいの特徴である (べき) ことが広く認められていることによって、小説において女性のセリフであることを明らかにするため十分に役割を果たしていると言える。しかし、実際の会話だと、音声と「画像」を通して、そして聞き手の直接参加によって、誰

がターンを取っているか混乱することは少ないだろう。そのために書き換えにおいて過剰なマーカーが省略され、言語の経済性がアップされるのである。

4. まとめ

本調査の結果、小説の会話文において性差マーカーが読み手・被験者にとって「自然」なものと判定されても、同じものが必ずしも話しことばにおいて使用されるわけではないことが判明した。さらに、話しことばにおいて使用が既に減少している性差マーカー「かしら」および「わ」は小説中の会話文において未だに許容されることが分かった。被験者の書き換えでは終助詞の「かしら」および「わ」、格助詞類「を」、「が」、そして頻度が少なくなるが「は」の省略が目立ち、そして動詞の文末形式ではより短い形式、まとめて言えばインフォーマルなものが選択される。名詞の場合も同様に漢語より和語が好まれる。

全体的に、小説中の会話文と話しことばを比較すれば、小説中の会話文より話しことばの方がインフォーマルなことばづかいを優先させる傾向が見られる。これは小説がいくら話しことばを取り入れても媒介としてやはりよりフォーマルであるからであろう。

性差マーカーは小説中の会話文にどうしても含められない性の決め手となる情報（実際の話しことばでは音声や画像で与えられる情報）を補う役割をもつと考える。つまり、著者はターンをはっきりさせるため、そして話し手について誤解を防ぐためステレオタイプに近い表現を利用する。読み手は同じ理由で、ある程度の誇張を許容する。そして、格助詞類が小説中の会話文において省略されない理由は同様に誤解を防ぐためであろう。漢語の多用はおそらく著者のスタイルの印であり、発話者に関する情報を補っていることは考えがたいのである。そして、話しことばの方がよりインフォーマルなものを好むため和語に書き換えられていると考える。

5. 今後の課題

本調査は自由回答で行った。統計的処理を行うためには人数（女性 57 人）が不足している。しかし、このような少人数で行った調査でも書きことばにおける会話文と話しことばにおける会話とのギャップに関する傾向を示すことができたと考える。

今回の分析は多くの場合、書き換えの要因に十分に触れていない。例えば、被験者は助詞「は」より「を」や「が」を頻繁に省略することが判明した。これは今後より詳細な分析が必要である。格助詞類の省略によって発話のリズムがよくなり、経済性の上昇が得られるという可能性を探るのも興味深い。また、発話によってなぜ格助詞が省略されるか否か考えたい。

本稿ではまったく触れなかった男性のことばづかいにおけるマーカーの現状についても今後分析を行っていきたいと考える。

そして最後に、逆の調査も興味深い。つまり、被験者が書き換えた文の「自然さ」を判定してもらい、元の文とどう異なるかを調べる。この場合、男女差がまだはっきりしているかどうかそれともかなり中立的な文になったことによって発話者の性が不明になっていることなど考察できる点がいくつかある。

【注】

- 1) 性差マーカーは性を明らかにする語句である。一方の性によってのみ使われ、他方の性にはまったく使われないといった絶対的なものではなく、多くはどちらかの性に偏ってよく使われるといった、程度の度合いを表すものである (Vanbaelen 2001)。
- 2) 主人公のこ子が20歳で、彼女の姉二人は20代前半。周りの友人や彼氏もそのくらい。こ子は一度大学受験をやめたものの今もう一度受けるかどうか悩んでいるところ。そして、その他20代の若者が持つ悩みやバイトに関する場面などが多い。
- 3) 第1部の分析はVanbaelen (2001) を参照。
- 4) 調査質問用紙のサンプルは付録として論文末に挙げる。
- 5) 女性の被験者に女性発話者のセリフ、男性の被験者に男性発話者のセリフを書き直してもらった。会話5(母と娘の間)のものだけにすべての被験者に自分の母にそのようなこと言われたらどのように返事するか回答を求めた。さらに、会話3および会話4の場合、「母」という発話者は年齢的に被験者と離れているから書き換えを求めないことにした。
- 6) 1996年に行った調査の結果、「かしら」および「わ」は「あたし」の他に「非常に女性的」として判断された (Vanbaelen 1997)。
- 7) 括弧内の数字は各会話の発話者を示す。例えば、(2-1)の場合、会話2の1番目の発話者によるその会話においてのすべての発話となる。
- 8) 金水がいう「役割語」は範囲がやや狭く漫画や小説に登場する特殊なキャラクターのことばづかいを指す。しかし、読者の内面には小説に現れるごく普通の人物でもことばづかいがこうあるべきだという人物像が既に出来上がっている。それは読者自身が社会のメンバーである以上その社会の規範を内面化しているからである。

【資料】

江國香織 1996 『流しのしたの骨』東京：新潮文庫

【参考文献】

- Finegan, E. & Biber, D. 1994 Register and social dialect variation: an integrated approach. In Finegan, E. & Biber, D. (eds.) *Sociolinguistic Perspectives on Register*. Oxford: Oxford University Press, 315-347.
- 金水敏 2000 「役割語探求の提案」佐藤喜代治編『国語史の新視点』明治書院、311-351.
- Okamoto, S. & Sato, S. 1992 Less feminine speech among young Japanese females. In Hall, K. & Bucholtz, M. & Moonwomon, B. (eds.) *Locating Power: Proceedings of the Second Berkeley Women and Language Conference*. Berkeley: Berkeley Women and Language Group, 478-488.
- Reynolds, K. A. 1990 Female speakers of Japanese in transition. In Ide, S. & McGloin, N. H. (eds.) *Aspects of Japanese Women's Language*. Tokyo: Kuroshio, 129-144.

- Shibamoto, J. S. 1985 Japanese Women's Language. New York : Academic Press.
- Shibamoto, J. S. 1990 Sex-related variation in the ellipsis of wa and ga. In Ide, S. & McGloin, N. H. (eds.) *Aspects of Japanese Women's Language*. Tokyo : Kuroshio, 81-104.
- Takano, S. 2000 The myth of a homogeneous speech community : a sociolinguistics study of the speech of Japanese women in diverse gender roles. *International Journal of Society in Language*, 146, 43-85.
- Vanbaelen, R. 1997 「男性同性愛者のことばづかい — 一般の男性、及び女性との比較 — 」『筑波応用言語学研究』4号、167-180.
- Vanbaelen, R. 2001 「小説に使用される性差マーカー」『筑波応用言語学研究』8号、85-98.

【付録】

質問紙調査の第2部

以下の文を読み、小説のなかのセリフとして自然であるか答えてください。また自分が実際にそのような会話をするとしたら、どのように言うか書いてください。

1) 20代前半の恋人同士の会話

- a. こと子→深町直人「恋人っていうのは好き同士なのにどうして別れちゃうのかしら」
- b. 深町直人→こと子「お姉さんのことを考えてるの？」
- c. こと子→深町直人「ちがうけど、そよちゃんたちもそうね」「どうしてかしら」
- d. 深町直人→こと子「わからないな」「どうしてだろうね」
- e. こと子→深町直人「私たちが別れるときになればわかるかしら」
- f. 深町直人→こと子「そうだね」

1-1 こと子のセリフ：自然 やや不自然 不自然

1-2 深町直人のセリフ：自然 やや不自然 不自然

あなたならどのように言いますか。女性は<こと子>のセリフ、男性は<深町直人>のセリフを書いてください。

- a. こと子：
- b. 深町直人：
- c. こと子：
- d. 深町直人：
- e. こと子：
- f. 深町直人：

2) 20代前半の友人の会話

- a. 友人(女)→こと子「ね、岸子から年賀状が来た？」
- b. こと子→友人(女)「こないわ」
- c. 友人(女)→こと子「大学を辞めちゃったんですって。留学するって書いてあったわ」

2-1 友人(女)のセリフ：自然 やや不自然 不自然

2-2 こと子のセリフ：自然 やや不自然 不自然

あなたならどのように言いますか。女性のみ<こと子>と<友人(女)>のセリフ両方書いてください。

- a. 友人(女):
 - b. こと子:
 - c. 友人(女):
- 3) 母、娘(こと子、20代前半)と息子(律、15歳)がこと子の将来について話し合っている。
- a. こと子→母、律「ちょっと訊きたいんだけど」「私は何になったらいいと思う?」
 - b. 律→こと子 「何って?」
 - c. こと子→律 「職業よ」「事務員とか歯科衛生士とかケーキ屋とか、何が向いている思う?」
 - d. 母→こと子 「そうねえ」「どれもあんまりねえ」
 - e. こと子→母 「みんなどうやって職業を決めてるのかしら」
 - f. 律→こと子 「ことちゃん働くの?」
 - g. こと子→律 「わからないわ」「模索中なの」

- 3-1 こと子のセリフ: 自然 やや不自然 不自然
- 3-2 律のセリフ: 自然 やや不自然 不自然
- 3-3 母のセリフ: 自然 やや不自然 不自然

あなたならどのように言いますか。女性は<こと子>のセリフ、男性は<律>のセリフを書いてください。

- a. こと子:
 - b. 律:
 - c. こと子:
 - d. 母→こと子「そうねえ」「どれもあんまりねえ」
 - e. こと子:
 - f. 律:
 - g. こと子:
- 4) 母と娘(20代前半)が父親が朝帰りしたことを話している。
- a. こと子→母「きのうのこと、とうさん何て言い訳したの?」
 - b. 母→こと子「なんでもないみたいよ」「それよりこと子、めずらしく早起きね」
 - c. こと子→母「うん、ちょっとでかけるの」

- 4-1 こと子のセリフ: 自然 やや不自然 不自然
- 4-2 母のセリフ: 自然 やや不自然 不自然

あなたならどのように言いますか。女性のみ<こと子>のセリフを書いてください。

- a. こと子:
- b. 母→こと子「なんでもないみたいよ」「それよりこと子、めずらしく早起きね」
- c. こと子:

5) 母と娘 (20代前半) の会話

- a. 母→こと子「こと子」「あした、お歳暮をだしにいきたいんだけど」
- b. こと子→母「わかった」

5-1 母のセリフ：自然 やや不自然 不自然

5-2 こと子のセリフ：自然 やや不自然 不自然

お母さんにそのように言われたらあなたはどのように答えますか。男女とも答えてください。

- a. 母：「あした、お歳暮をだしにいきたいんだけど」
- b. 自分：

6) 恋人同士 (20代前半) が待ち合わせしているが彼の方が遅れてきた。

- a. 深町直人→こと子「ごめん、友だちに送ってもらったら、渋滞しちゃって」
- b. こと子→深町直人「走ってきたの？車をおりて？」
- c. 深町直人→こと子「おごるよ、お詫びに」

6-1 深町直人のセリフ：自然 やや不自然 不自然

6-2 こと子のセリフ：自然 やや不自然 不自然

あなたならどのように言いますか。女性は<こと子>のセリフ、男性は<深町直人>のセリフを書いてください。

- a. 深町直人：
- b. こと子：
- c. 深町直人：

7) 兄弟同士の会話：恋愛関係で悩んでいるしま子の様子をみにきたこと子と律が酔って泣いているしま子に話しかける。

- a. こと子→しま子「これ、瓶ごと飲んでたの？」
- b. 律→しま子「毒だよ、そんなに泣いちゃ」

7-1 こと子のセリフ：自然 やや不自然 不自然

7-2 律のセリフ：自然 やや不自然 不自然

あなたならどのように言いますか。女性は<こと子>のセリフ、男性は<律>のセリフを書いてください。

- a. こと子：
- b. 律：

8) バイトをした理由で担任の先生に呼び出された弟に様子を聞く姉。

- a. こと子→律「どうだったどうだった？おもしろかった？」「担任に呼び出されたんでしょう？何の用だったの？」
- b. 律→こと子「たいした用じゃなかったけどさ」「でも母さんに気の毒なことしちゃったな」
- c. こと子→律「たいした用じゃない用ってなによ」

8-1 こと子のセリフ： 自然 やや不自然 不自然

8-2 律のセリフ： 自然 やや不自然 不自然

あなたならどのように言いますか。女性は<こと子>のセリフ、男性は<律>のセリフを書いてください。

a. こと子：

b. 律：

c. こと子：

(ルート・ヴァンバーレン 筑波大学大学院博士課程文芸・言語研究科 応用言語学)